

総括：長門中世城館の調査を終えて

服部，英雄
くまもと文学・歴史館：館長

<https://hdl.handle.net/2324/1936960>

出版情報：2017-03. 山口県教育委員会
バージョン：
権利関係：

4. 総括

(1) 長門中世城館の調査を終えて

1)

今回の調査で長門国 222 カ所の城館遺跡を確認し、うち 87 カ所の図を掲載できた。完成した縄張り図をどう読み解けばよいのか。縄張りは千差万別である。

山城は、たいてい遠くから見て城山だろうと推測できる。ふつうの山とちがって、山頂が平坦で水平になっていたりすれば、まずまちがいなく城山である。しかしあがってみても土塁や堀切はないこともある。

まず水平地を確保することが城作りのはじめである。自然の山は円錐であって、山頂は点である。そこに平地・平面を作るといふことはたいへんな労働であった。城作りのための動員を命じた古文書がしばしば残されている。記録上、数ヶ月の動員がなされた城でも、いくぶんせまい平地が連続しているだけのこともある。しかしながら、そこまでを造作すること（普請、作事以前の工事）が城作りの基礎であった。盛りあげるためには土が必要なのだが、下から上げるわけにはいかないから、山頂部の一部を削った。高さを確保するためには、頂部はできる限り削りたくはなかったけれど、土はほかにないから最低限削って、主郭を作った。つづいて周囲を削り、そこにも段ができて、こうしていくつかの段ができる。大がかりな平坦地が確保できれば、くるわ（曲輪、郭）になった。

土塁や堀を作ることはその数段階、先のステップである。平地を十分に作りきれず、必要な平坦部を確保できないこともあって、そうしたときに不足する敷地分は、斜面に柱を打ち込んで、材に、ほぞをあけたり、貫を通したりして、横材を渡して建物にした。懸け造りである。そうすると狭い平地でも建物がたった。展望はこちらの方が得やすかったし、加えてそこから弓矢や投石が可能となって、この懸け造りの方が有利なこともある。古文書に合戦のあった城として記録されていても、なだらかな斜面のみで、顕著な遺構のない城山もある。おそらく調査すれば柱穴はあって、平面の不足を補った。短期の籠城ならば、それで対応できた。

守るべき空間ができると、斜面の木は薪用に確保すべきものをのぞいて、すべて切り払った。それではなければ有効な弓矢の射撃も投石もできない。つぎに斜面に豎堀をこしらえて、守りを容易にした。攻める側は豎堀のなかを攻め上るしかないが、上からの矢や落ちてくる石を逃れるための機敏な対応は取れなかった。左右への動作がしづらい斜面を登ろうとは、ふつうの兵士はしなかったし、大將も犠牲が増えるばかりの命令は出せない。豎堀は見るだけでも難攻不落を思わせる効果があった。

風雨をしのぐための建物と飲み水を得るための井戸は不可欠だったが、山城では最頂部の主郭に水脈があるはずはなかったから、安全に水が確保できる水の手道を確保して、井戸または流れのある谷底まで毎日水を汲みにいった。水は城外、曲輪の外にあることが多かった。今回の調査では井戸跡の位置まで把握できた城館は少ないが、城には必ず付随していたはずで、井戸がなければ、最短の位置にある谷がその機能を果たした。

簡易で、臨時的な城作りに始まって、やがて長期の籠城に耐えうる拠点としての精巧な城作りがなされる。横堀が掘られ、土塁が築かれ、建物も頑丈になった。そうすると造作には時間も費用もかかるし、多くの労働力が動員された。

雨を防ぐ建物と水確保のための井戸があれば、必要期間分の食料と武器を下から上げれば、籠城は可能になった。長期の籠城であれば、食料と武器の補給継続が必要となる。兵糧攻めでこの補給路が断たれれば、落城となって逃亡するか、降参になった。籠城作戦で道がひらけるのは、必ず援軍がく

ることで、援軍がこなければ落城した。

2)

城の地名を見ると同じようなものがある。今回の報告ではおどろくほど茶臼山が多かった。報告では茶臼ガ嶽を含めて計14城があつて、もっとも多い。茶臼は下の受け皿(下石)と挽き臼からなっているから、頂上部の平坦な曲輪とその下の段の斜面までを挽き臼、一段下の曲輪を受け皿とみて連想したものであろう。茶臼からの連想ならば、頂部の主郭があつて腰郭は一段か、あつても二段程度となる。菊川下岡枝の茶臼山に関しては『地下上申』にそうした記述があつて、十間四方の平場があつて、それをとりまく茶臼の縁があるとされている。よつて茶臼山という山の呼称は、城が作られたあとの命名となる。茶臼山ならば、かならず城があるとはいはず、古墳である可能性もある。円部をそのように見たのだろう。

かろうと山という地名もあつて、「かろうと」は「からと」、「唐櫃」の意、転訛であるから、直方体からの連想であらう。段(切岸)が直立していた。主郭は方形であつたらしい。稲積山地名は城郭の機能よりは山容からきた呼称である。こちらは築城以前からの山の呼称となる。羽場城も「はば」には崖(阻)の意味があるから、それに由来か。

要害、城の腰、城の平は城そのものをさす呼称である。勝山城もあつて、串崎城も雄山城(勝山城)と呼ばれた。築城に当たり城主が縁起をかついだものであらう。敵陣が城というものもあつた。大將陣は一夜城ともされ、陶晴賢の陣城とされる。大將軍は陰陽道八將神のひとつである大將軍であるならば、城の呼称ではない。

火の山は狼煙山であつたことに由来する。かならず受け継ぐ山と受け継がれる山があつて、線になつて連続する。近世萩藩ののろしについては『防長風土注進案』に詳細である。近世には萩から山口、防府、萩から下関へのルートが基幹線であるが、中世ならばそれぞれの領主のもとに情報が速やかに達するように、のろし網が作られていた。ただしのろしルートでは相互に煙を確認しやすい場所は決まっていたから(背後が黒い場所など)、中世のものが近世にも踏襲されたであらう。

3)

長門は北と西と南が海であつた。近世の主要な城郭は小倉城、中津城、福岡城、唐津城などいずれも海城である。長門の近世城には萩城、長府城(串崎城)があるが、ともに海に囲まれるか、接する。近世以前には大量の物資を運搬する方法は船しかなかったから、海近くに築城する必要があつたし、海陸の経済の要を押さえることができた。海城は城の一角に海水、または潮の影響を受ける河川がある。軍事上も経済上も海城には想定以上の大きな任務があつて、築城するならば、海のない山地よりは海岸を選択することは当たり前だつた。

他国領から長門を攻める場合、海路が採られることが多かつた。港近くの山を占領できれば、そこが当面の陣地となつた。海岸堡である。海縁の山は海岸堡になる可能性があつたから、あらかじめそれを予想し築城しておき、それを阻止する。長門海岸には海岸堡と推定される城がとても多い。

他国領は石見、豊前等、日本国内の他国の場合もあるが、日本ではない外国のこともある。古代に長門城が築城されたように、長門は大陸・朝鮮半島に至近であつた。

中世の良港として知られる肥中湊に近接しては肥中城がある。1471年に朝鮮の申叔舟が記した「海東諸国紀」に長門州賓重関がみえる。豊臣秀吉の文禄・慶長の役でも肥中湊から渡鮮した。蒙古襲来時に元軍(東路軍)の一部が長門に上陸した。肥中は上陸地伝承のある神田に至近で、チャイナタウン地名である東法(とうぼう=唐房)、東法湾にも近い。

それ以前、文永の役後に元使杜世忠が長門室津に上陸している。室津(下)港近くに青山城、烏山

城がある。

現在は忘れられているが、歴史上のある段階にて為政者は外国から攻め込まれる事態とその防衛を想定したはずで、こうした山にも防衛機能が期待されたであろう。そうした危機に恒常性・長期性がない場合は、施設も簡便なものに留まった。

今浦、須佐、深川を始め、海陸が入り組み、良港の多かった長門海岸の城は、いずれも海岸堡として重要な任務を担ったはずである。また海岸線は見通しがよかったから、狼煙山が多く設置されたであろう。そのことは先述の『防長風土注進案』の記述から推測できる。

4)

近時、山は放置されて、登山道もなくなりつつある。

そうした困難のなかでこの報告書が作成されたことには大いに意味がある。文化財保護行政の一環として、その活用にまた保護に、今後大いに貢献することだろう。これを手がかりに、城跡に関心をもつ人々が増え、多くの方が踏査されて、埋もれていた地域の歴史に関心が深まれば幸いである。